

正月という時間

ㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

新年早々、清潔だ不潔だなどと、あまりシカツメらしい話をするのもどうかと思うので、ちょっと正月に因んだ雑談に切りかえてみることにしよう。

「正月という時間」について述べようと思うのだが、これはもう少し正確に言えば、「正月という儀礼の時間」ということになるであろう。

「儀礼」と言えば、企業家やビジネスマンにとっても決して無縁のテーマではないし、バランス思考という欧米流の清潔感ともどこかで関わってくる。

この儀礼を精神的なものに結びつけるか、物質的なものに結びつけるかということが大問題で、それによっては、正月という時間の意味もずいぶん異なった様相を帯びてくる。

一部の企業や組織にとって、この儀礼は金銭的利益に結びつく。この機会を逃さず、一儲けしようとする人たちも決して少なくはない。こういう人たちにとって、正月という時間は絶好の稼ぎ時にほかならないのである。

しかし、正月を絶好の稼ぎ時と考えているのは、正月産業に従事する大人たちばかりではなかった。子供たちの間にも、同じような意識が広がっているのを知って、私は少なからず驚かされたのである。

彼らにとって、お正月とは何よりも、お年玉の稼ぎ時なのである。テレビのインタビュー（2007年1月）でも、デパートの玩具売場に来ている子供たちに向けられたのは、お年玉についての質問ばかりだった。

「おじいちゃんにいくら貰ったの?」「お年玉は全部でどのくらい?」「いったい何に使うの?」「貯金はするの?」等々の質問がやつぎばやに子供たちに浴びせられていた。

こんな質問しか出てこないのかと、私はやや呆れて見ていたのだが、子供たちの答を聞いていると、彼らにとっても、お年玉をもらうということがお正月の最大の関心事であることを実感せずにはいられなかった。

その中でも特に異彩を放っていたのは、小学校四、五年生と思われる男の子の答だった。

「臨時収入ですからね」と彼はひとこと言って、それ以外のことは答えなかった。私は実のところ、この子が何を言いたいのか量りかねて、しばらく考え込んでしまった。

今の子供はすごいことを言うもんだというのが、その瞬間に感じたことのすべてだった。

正月というハレの日を迎えた喜びも、お年玉を貰って突然豊かになった嬉しさも、それをどう使

おうかという子供らしい期待も、「臨時収入」というきわめて即物的な言葉で片づけられている。

定期的な収入でもないかぎり、これからの計画など立てられないし、取り立てて騒ぐほどのことでもない、ということなのであろうか。

だが、それにしても、子供の言葉としては、いかにも冷めすぎている、というのが私の実感だった。

正月は、本来、古いものが去り新しいものが始まる一年の区切りであり、新鮮な気持ちで迎えるべきものとされている。

しかし、この「新鮮さ」を感じるためには、儀礼を精神的な意味でとらえる意志が必要である。儀礼から精神性が失われ、物質的なものに支配されるようになると、新鮮さも失われて希薄になってくる。

実は、こういう新鮮さを純粹に保っていられるのは、子供の頃だけなのだ。正月と言っても、大人になり、歳を取るにしたがって、新鮮な気持ちもだんだん薄れてくる。

私自身、正月がくると理由もなしに嬉しい時代があった。コマを回したり、凧を揚げたりという、儀礼としての遊びを通して、正月が何か特別な「時」のように思えたものである。

お年玉は、そういうハレの時を目立たせる一種の印のようなものであって、お祭り気分を煽り立てるお祝い儀礼の域を出なかった。「収入」などという発想はどこからも出てこなかったし、また、それほどの額でもなかった。

歳を取るにつれ、童心を失うにつれ、こうした正月に対する新鮮な気持ちが薄れてくることは否定できない。

「元旦や冥土の旅の一里塚」などという川柳があるように、正月がくるたびに感じさせられるのは、むしろ「時間の有限性」であるときえ言える。

「モチカネ」という落語があって、以前は正月になるとラジオやテレビでよく演題にされていた。

八さんだったか熊さんだったか忘れたが、この男が正月に、ご最賃の旦那さんのところでご馳走になる。宴もたけなわ、或る人が雑煮の餅の中に入っていた釘を嚙んでしまうが、とっさに気転を利かして、

「モチの中からカネが出てきたから、今年もこの家はますますカネモチになる」と言って、旦那さんを喜ばせる。

すると、八さんか熊さんかの言うには、

「カネの中からモチが出てきたのならカネモチだが、モチの中からカネが出てきたのだから、今年はこの家はモチカネ」ということで、正月のハレの時を皮肉った落ちになる。

新年早々こんな落語をやっていたのだから、なんとも大らかで、自由磊落な時代だったとも言えるが、正月が来るたびに寿命のほうもだんだんと「モチカネ」ようになってくる人間の、滅びの運命を前提にして祝うのが正月という儀礼の時間なのだとしたら、この落語の気分も分からないわ

けではない。

時間の有限性を一段階乗り越えたところに目出度さがある。正月は、それを乗り越えた者たちが一堂に会して、新たな出発を祝い合うことに意味があり、いわば毎年行う「再生」の儀式、イニシエーションの儀式と言ってよいだろう。

イニシエーションの儀式は、あらゆる社会に見られる参加儀礼であって、「加入式」などとも呼ばれている。日本では、成人の日が典型的な加入式の日とされているが、それより十五日早い元旦こそが、もっと広い意味で、全国民にとっての、新しい一年の生への加入式になる日だと言うことができる。

時間の有限性のなかで持ち兼ねるものを、なんとか持ち堪えることができた。その喜びを祝うとともに、新たな一年を生きるための決意をみんなで確認し合う日ということで、この正月の儀礼は、時間的な「同時性」を必要とする。

今年の元日、わが家を訪れた宅配便の配達員は、顔馴染みになっているいつもの女性配達員ではなかった。毎年、この女性と新年の挨拶を交わすのが慣例になっていたので、訪れた男に彼女の消息を尋ねると、彼女は昨年交通事故で亡くなったという答が返ってきた。

三十代の後半で、女性ながら重い荷物を平気で運び、大型車のハンドルを力強く回していた彼女が、仕事上の事故ではなく、休日のんびり自転車に乗っているところをハネられたという話だった。緊張から解放された一瞬の心の隙間だったのであろう。

つつがなく一年を過ごしたことを喜び合い、これから始まる一年の生を励まし合うという、儀礼の時間の同時性は、これによって永遠に失われたのだ。もう彼女とは、二度と同じ時間に顔を合わせてハレの時間を持つことができないという儚さを、この日が元旦であっただけに、私はいっそう強く感じたのである。

儀礼交換の同時性ということは、正月というハレの時間を考える上で非常に重要な意味を持つのだが、このことについては、次回に、年賀状交換の同時性ということを中心にして、考えてみることにしよう。

[2008/01/05 magmag]